

こやブランケット

ニュース 2026 vol.35 冬号

米阪パイル織物(株)

和歌山県橋本市神野々 720

TEL: 0736-32-1404 / Mail: info@yyypile.com

営業時間: 8:00~17:00 (土日祝除く)

弊社HP

商品の詳細はQRコードをチェック!



チラシ見ていただいた方限定!
まごめ買いは相談に応じます。
詳しくは弊社まで連絡を!



今や地球上の生き物すべてが難民家族!



2025年を振り返ると、天災・人災が気になる年であった。大規模な山火事が各地で発生した。岩手県大船渡の山火事は国内最大の3,300haを超える面積が延焼した。海外では、ロサンゼルスで23,000haが焼け、16,000棟の建物が焼失・損壊した。アフリカ大陸だけでも上半期でフランス国土分の面積が焼失したそうだ。地球沸騰化の影響は計り知れない。香港のマンション火災は、日本では見ない竹の足場や窓を塞ぐ発泡スチロール、保護ネットが焼けて燃え広がった。こちらは防火基準を満たさないものを使用していたので人災の色が濃い。埼玉県の深さ・広さ10m四方の道路陥没はショックだった。インフラの「限界」を社会問題として象徴する事件でもあった。食品にも影響を及ぼす。コメを始め、野菜・果物にも影響が深刻化し、海の幸も例外ではない。漁場変化が強いられ、今まで漁獲できた魚がいなくなり、別の魚に変わる現象が各地で報告されている。食料難は人間ばかりではない。冬眠前のクマが全国各地の人里で目撃され、一部で怪我・死亡事故に遭遇している。緊急駆除に頼らず難民同士共生の道を探したい。高市首相の台湾有事に関する一言が発端の日中関係、日本への渡航自粛の呼びかけ、再開直後の日本産水産物の中国輸入の停止措置、日本人アーティストによる中国公演中止等、レアアースにも及ぶ様々な報復措置が取られ、子どもじみた喧嘩のようにも見えるが、日本産業全体にも影響し、事業者にとれば事態は深刻だ。始まる前は、各方面から揶揄された万博は、蓋を開ければ盛況だった。未だにミャクミャクグッズを連れて歩く人に街で遭遇する。ドジャースが球団史上初のワールドシリーズ2連覇を達成。その立役者に3人の日本人が含まれることは誰もが認めるところである。絶好調大谷が2026年はどんな伝説を創るか今から楽しみである。怪我だけはしないでと世界中から声が聞こえる。



AI

今やAI技術は驚くべき進化を遂げようとしている。概念の誕生は1950年代で第一次AIブームと言われ、人工知能 (Artificial Intelligence) という概念が初めて創り出された。第二次AIブームの1980年代には、医療診断支援システム等に応用を試みたが、汎用性の低さに課題が残った。第三次AIブームは、2000年代から現在に至り、ルールベースでなく、データベースでコンピュータ自らがデータから学習する「機械学習」の技術が実用化された。さらに「ディープラーニング (深層学習)」という技術革新と、インターネット普及による「ビッグデータ」の蓄積がAIの性能を飛躍的に向上させた。私ども古い人間にとっては寄り付き難い印象を受けるが、実際使ってみると便利である。TVで小学校の宿題 (標語作成) を小学生が内緒でAIを使って、見事入選した例を紹介していた。しかし弱点もあり、AIを使った人が同じ作品を出していた (普段ならありえない確率である)。論文や会議の要約作成や外国語の翻訳などは、お手のものである。テキストに限らず、画像や動画も生成できる。YouTubeサイトには、生成AIによるものと思われる動画が溢れている。漫画やアニメのメインキャラクターが実写版として出ている。世界中で人気の「鬼滅の刃」撮影シーンでは、筋骨隆々の柱や炭治郎の劇場版カットや「呪術廻戦」の五条先生やナナミンが躍動したり、実写版の映画化が待ち遠しくなるくらいリアルな完成度で出てくるから時代の進化を感じざるを得ない。ガンダムやジオングの実写版が動くシーンにも感動した。AI技術を活用した、今後のビジネスの広がりを感じざるを得ない。



家族

今やSNSの投稿がバズって、人生が開けた話はいくらでもある。人生で遭遇する悲劇をSNS投稿により喜劇に昇華していく話を聞き、ある本を購入して読んだ。主人公 (女性) が中学2年のとき、父が心筋梗塞で亡くなった。前日に喧嘩して「パパなんか死んでまえ!」と呪の言葉を発したことで自責の念に駆られる。その2年後には母が大動脈解離で突然倒れ、生死の瀬戸際で手術に成功するも車椅子の生活に。4歳年下の弟は生まれつきダウン症。と、他人から見たら不幸のどん底とも思える。悲劇を笑いに昇華させる主人公の生き様を読むヒトに勇気と生きるヒントを与える。弟は面倒をかける立場でなく、主人公を助ける存在である。主人公の考え方や気持ちの切り替えのうまさを読者の心をつく。この「家族だから愛したんじゃない、愛したのが家族だった」はNHKが2023年にドラマ化し、河合優実がドラマ初主演を務めた。関東出身の彼女が本人と全く違和感なく、自然な関西弁や流暢な英会話をこなす姿は、朝ドラ「あなぱん」の主人公の妹役でも光ったが、こちらも素晴らしい。見た人全てに感動を与える心温まる作品だ。家族のあり方について考えさせられ、前向きな気持ちにさせてくれる。

